



造る時代から守る時代へ

—橋の未来を支える、確かな技術—

きょう8月4日は「橋の日」だ。高度経済成長期に整備された橋梁の老朽化が進む中、建設業は「造る時代」から「守る時代」へと役割を変えつつある。創業以来、約50年にわたり橋梁メンテナンスに携わってきたinfratは、最前線で社会インフラを支え続けてきた。特別連載第2回では、飛鳥正文社長に安全と品質を支える企業方針を聞いた。

—橋梁を中心としたインフラの老朽化を、どのような危機感を持って見ているのか

橋は造ることが目的ではなく、人や物流を安全に渡し、その機能を将来にわたって守り続けることにこそ価値がある。全国の橋梁の多くが老朽化の節目を迎える中、落橋事故がいつどこで発生してもおかしくない時代が近づいている。事故を未然に防ぎ、できるだけ長く使い続けることが私たちの使命だ。一方で、担い手不足や資材価格の高騰により入札が成立しない案件が増えている。社会インフラを止めないためには、厳しい条件の案件にも真正面から向き合い、発注者と丁寧に対話を重ねながら、必要な品質と安全を守るための適正価格を理解してもらうことが欠かせない。時間や手間を惜しまないことが未来の安全につながると考えている。

—老朽化対策を進めていく上で、最も重要なことは何か

何より大切なのは基本を徹底することだ。現場の事故は、特別な技術の不足よりも段取りの甘さやわずかな気の緩みから起こるケースが少なくない。だからこそ、準備段階から一切の妥協をせず、余裕のある工程を組み、仮設や安全設備にも十分に手をかける。現場に「ゆとり」を持たせることを私たちは強く意識している。新技術もちろん重要だ。ただし、それはあくまで手段である。社会インフラを支えているのは、日々の点検や補修を積み重ね、確かな仕事に取り組む技術者たちだ。それこそが、暮らしと安全を守る土台になると信じている。

—現場の「ゆとり」を生み出すための工夫を教えてください

「後方の無駄が一つ減るたび、現場のゆとりが一つ増える」。この考えを徹底している。管理コストを抑えて生み出した余力を、すべて現場へ還元する体制を築いてきた。書類作成や積算、見積りといった管理業務にはAIを積極的に活用し、標準化と効率化を進めることで現場により多くの力を回せる体制を整えている。また、採用業務をホールディングスに一元化したことで現場の負担を軽減しながら、必要な人材を安定的に確保しやすくなった。現場にはゆとりを、バックオフィスには効率を。その両輪がかみ合って初めて、技術者は本来の力を発揮し、安全で質の高いインフラメンテナンスが実現できると考えている。

代表取締役社長
飛鳥 正文



人と、インフラと、ずっと。

infrat

株式会社 infrat

〒216-0044 神奈川県川崎市宮前区西野川12-37-35
東京支店 〒103-0004 東京都中央区東日本橋2-8-5 東日本橋グリーンビルアネックス6F
<https://infrat.co.jp/>

記事広告

特別連載

02

special feature